

齊藤国治教授の古天文学と天文学史研究

横尾広光

齊藤国治先生とは天文学史の縁で交流させていただいた。同じ多くの天文学史の同好研究者が三鷹のお宅を訪ねたものである。若き日の齊藤先生の三鷹アインシュタイン塔での重力赤方変移の観測のことで協同して、太陽塔の歴史を書いたとき「天文月報原稿の打ち上げ記念に」というので大沢の自宅でお寿司をご馳走になった。先生からは「いやア-天文学史は面白い。もっと早くからやっていたら良かった」と述懐された。

東京天文台報に連載された、日本日食観測史、明治7年金星過日、明治43年ハレー彗星などの大部な資料集の近代天文学史から天文学史研究に入られた。精力的で徹底的だった。昭和20年東京天文台本館火事、空襲も当日宿直だった体験をまじえて記録を印刷されている。

退官後に本腰を入れて「古天文学」にとりくまれ、パソコンを導入してジュタン爆撃的に全歴史期間にわたって各天文古記録に照応する天文年代学的計算をされた。その成果に基づいて天文年代学の名を古天文学、Paleoastronomy、に拡張すべきことを強調された。これには先生の都会人らしい広い関心と教養から、横に横にひろげて、文系の文献家へのアピールが特にふくまれている。

東京天文台員小川清彦(1882-1950)の流れの後継者を自認された。小川論文は日本書紀の暦日が編集時の暦によって逆算して付けられたことを証明し、戦争後はじめて公表された、日本書紀研究の第一基本文献である。自由な歴史記録者としての御自覚からか、戦時下天文台内部で小川の発見



種子島金環食(1958年)
左より小林さん、齊藤先生、河野さん、泰さん

がいかに嚴重秘密あつかいされていたかの証言を記録しておられる。

天文学史は(1)天文史料収集、(2)古暦学、(3)天文年代学の3つの実用部門がある。そしてそのための道具に(4)天体暦計算作業がつく。

古天文学はどちらかといえば(3)中心の再編成・拡大プランである。

日本では(1)の神田茂「日本天文史料」のため東大史料編さん所の全文献にあたる(広瀬秀雄、大崎正次担当)作業中に、1054年カニ星雲超新星古記録が報告されて、大波紋を生じたことが有名である。こうした仕事に日本は世界でも特別に有利な場所だった。この種の収集作業のきっかけは、ハレー彗星回帰にそなえる明治日本天文学の寄与の発想かららしい。(2)の古暦学は京都スクールの中国暦法史がイギリスのニーダムの中国科学史と東西ならび立つ2つの巨峰のひとつで、その業績が特に高名である。京大宇宙物理学教室の人達がそれを展開するとき、東大天文の百済教猷が京都で行った天体暦計算法の講義は大きな助けとな



ラエ日食スナップ (1962年)
一番右側が齊藤先生

ったと藪内清教授は述べている。同世代の天体力学者萩原雄祐は伝統的正統派をのりこえるのに専念したのだから、歴史の流れは東京と京都で交叉している。先生の義弟の方が高等商船で渡辺敏夫先生の天文の講義を聴かれたそうで、先生は計算に入るのに渡辺教授の援助があったと話しておられた。私の兄にも清水の高等商船卒が居りますと申しあげ、おもわぬ奇縁を知った。

退官後に出版された古天文学の本は10冊以上にのぼる。精密検討ができる星食記録に特に注目された。岩波新書「星の古記録」が飛鳥時代の天文官の星食観測記録が正確であることを紹介したが、ある年代の読者には「日本書紀は正しいことを書いているのか」とおどろいた向きもあった。「雑誌に日本書紀記録のことを書いたら、編集者が獣皮をまとった半裸人が手をかざして月と星をながめている挿絵をつけた」と笑っておられた。

大著「中国古代の天文記録の検証」雄山閣はハードな仕事だったと共著の小沢賢二氏はお通夜の席でも齊藤宅での日々を思い出しておられた。

これらの業績は理系の性急な即効薬のようでなくとも、文系の漢方薬の効き目のように永くつづく。

齊藤以後の進展は、横への広がりだけでなく、天体暦計算に採用する定数が地球自転の不規則変化に応じて変わることから、中国各地や朝鮮、日本での同時観測記録（特に接食のデータ）を利用して、逆にそのときの地球自転を確定する精密化がある。

暦算思想との闘いが近代天文学史（広瀬秀雄）とされるが、天体物理への飛び移りで外から否定する道だけでなく、伝統性の内面にも変革の芽がある。カニ星雲超新星の例だけでなく、天文古記録研究は最新テーマにも有用である。

葬儀での御遺族や牧師様のお話では89年間、病を克服し、よく節制努力されてお仕事をなされたという。先生の古天文学へのくりかえしの招待に応ずる若き学徒の登場がのぞまれる。ここに御冥福をお祈りしたい。（2003年3月15日）

（杏林大学保健学部）